

冲

7

2022

伊与露（诗）



贅

力

能村 研三

記念号十六冊

浮雲は眠りのかたち鳥帰る

春一番坂ある街の書肆廢る

清冷な筧の水に独活晒す

あるがまま春は行つたり来たりかな

「沖」創刊五十周年の祝賀会は、三度目の正直（実際は六度目）を信じて規模を縮小しながらも無事開催することができた。当初の予定から実に二十か月の延期であつたので、実施できたことは喜びも一人であつた。

祝賀会会場の壁面に添って、「沖」の創刊号から五十周年記念号までの記念号十六冊の表紙絵を大きなパネルにして飾つた。

記念号の表紙にそれぞれの解説をつけ、「沖表紙絵でつづる50周年のあゆみ」というリーフレットを作つた。

五十年の中の記念号、十六冊を手元に置いてそれぞれ眺めてみると、改めて「沖」五十年に關わつて下さつた多くの先輩諸氏の「沖」への熱い思いとお力を感じた。

編集長は林翔先生が創刊号から通巻百五十号まで十三年、表紙絵は創刊号加藤利以地氏のペン画で飾り、上谷昌憲、野村東央留各氏が担当した。二代目編集長は渡辺昭同人が担当創刊十五

とれさうな 釘ちぎりぬ 春秋

花の種文字書くやうに蒔きにけり

春コート本屋の中のわが順路

日本間に椅子ある 暮し花明り

諸葛菜咲かす土墨は江戸名残

理科室へ一番に来るさくら冷

周年から二十周年まで、表紙絵は柚木力氏、中原道夫氏等が担当。三代目編集長は私が担当、中原道夫氏が表紙を飾った。四代目編集長は北川英子氏が担当、能村登四郎から研三への主宰移行期の編集に携わっていた。この時期は熊谷博人氏が表紙を担当した。創刊三十五年、四十年記念号は千田百里氏が担当、編集長退任後は五十周年まで同人会長をお務めいただいた。

現編集長辻美奈子氏は通巻五百号、四十五周年、そして五十周年を担当、五十周年以降は編集長に加えて同人会長にも就任していただいた。現在の表紙絵は池田蘭径氏の作品によるもので、氏は今回の祝賀会にもお越し下さり、お目にかかることができた。

記念号十六冊から五十年の歩みを俯瞰してみたが、本号まで創刊から通巻622号には大勢の方々が様々なかたちで「沖」一誌に関わって下さっていることを思うと謝恩の気持ちで一杯である。

ががんぼの脚

森岡 正作

大道芸 薄暑の街に火を吹けり

杜若 見る 正眼の構へして

花は葉に鯉の憂鬱 生まれり

虎尾草のそよと噂を聞き流す

木下閻 鱈あるやうに急ぎけり

ががんぼの脚あつさりと置いてゆく

蝮捕り人遠ざけて老いにけり

裸にて

登四郎先生に〈裸にて削ぎに削ぎたる詩のかたち〉という句がある。平成五年の作であるが、ずうつと若い時の昭和三十六年には〈発想のひしめく中の裸なり〉という句を作っている。

同じ「裸」という言葉でも、若い時の句の「裸」は具体的な裸を連想させて、余計な衣類など身に付けず身軽な涼しい気持ちでいると、要らぬ雑念も消えて必要な言葉や発想が次々と湧いてくる。それを整理出来ないくらいだという感じで句も荒々しく若々しい。

それに対して冒頭の句を、裸のまままで句作に専念していると解釈するのはつまらない。その「裸」は、「削ぎに削ぎ」との関連で何も着ることのない裸と、何も飾ることのない詩の言葉という共通性を表したのではなからうか。「裸」という季語の本意からはずれないと思うが、無用の言葉を「削ぎに削ぎ」いだ「詩のかたち」こそ俳句である。

蒼茫集

垂直

辻美奈子

* 垂直はひかりの速さ揚雲雀
眉間より来たる憂鬱袋角
今年竹履修屈に中国史
竹皮を脱ぐ齒並びを褒められて
亀の子に臍あるといふ裏がへす
風袋を引けば涼しき赤ん坊

私がルール

頓所友枝

* ひとりと私は私がルール蝮の道
木の香ある部屋に目覚むや夢見月
一木のされど沈丁夜を統ぶ
弓なりの街道の灯に春惜しむ
帰らざる父母なき故郷野蒜摘む
咲き満ちて桜の憂ひはじまりぬ

尽くるまで

栗原公子

風青し流れ解散してひとり
夏の月胸中にある休火山
門限のなきが淋しき緑の夜
* 尽くるまで降るほかはなし桜菜
スキップの練習たんぽぽ踏まないで
しやぼん玉もう飽きてゐるお父さん

春日の渦

田所節子

花ミモザ潜り潜りてペダル踏む
声大きい女のかこむ磯かまど
* 花吹雪刻は止まること知らず
枯山水春日の渦を濃くしをり
順待ちの名前書きぬる薄暑かな
樟若葉して縄文の住居跡

柏餅

大畑善昭

沖林仰賞を受く

熊谷草一輪挿して江戸切子
婿三人孫子八人柏餅
戸車の渋りを直し燕の巢
蝌蚪に足いろいろの雲遊び行き
*身をひねることが飛ぶこと燕の子
寝返りのそのとき薄目明易し

ドローン

峰崎成規

*持ち時間間はるやうに花は葉に
五月来るふたたび沖へ舫解く
風無くば家族寄り添ふ鯉幟
来客は子供の子供こどもの日
薄暑光四角に刻むビルの玻璃
ドローンの悲しき行方麦の秋

潮鳴集

名乗り

稗田寿明

会議録レコーダーからさへづれり
仕事ぶり巡視のやうに蜂通る
ゆく春や六法全書戻す棚
やはらかき風にととのふ白牡丹
* 薔薇園の薔薇次々と名乗りをり

討ち取る

道端 齊

影さへも臙となりぬ瀬戸の島
文机の文房四宝花明り
土ゆるぶ心もゆるぶ穀雨かな
* 息詰めて筍一本討ち取れり
山吹に誘はるるまま右の径

雷おこし

藤代康明

* 理科室の若き玄白緑さす
傘雨の忌雷おこしの紙を剥ぐ
明和七年梨祖の遺徳や梨の花
飛花落花地球は自転の譜を刻む
新茶の香ふはりと溶くる和三盆

父と子

小川流子

春うれひ眼鏡かけてもはづしても
偲ぶほど臙となりぬふるさとは
ゴンドラのすれ違ふ空山笑ふ
子供の日けん玉競ふ父と子よ
* 違ふ映画見に行く二人夏はじめ

知らぬ街

荒井千瑛子

戦火にて知らぬ街知る春の果
老鶯の鳴きつぐ墓の去り難し
見るよりも見らるる高さ桐の花
* 初夏のかをりや白き花づくし
更衣風の押し上ぐ藍のれん

しりしり

七田文字

余花の雨こころ静もる日となりぬ
横抱きにされてマネキン更衣
* レコードの始めしりしり巴里祭
水に写るあぢさゐも自惚れの花
ワイパーの弛き反復走り梅雨

文学館

大森春子

初蝶におくれて来たるピアニスト
* 亀鳴くやかかつてレシピの四人前
清和かな別邸今は文学館
位置変へて座るテーブル子どもの日
街なかの楽隊かすめ夏つばめ

風の抜け道

平松うさぎ

沢の水森の色して五月来る
月光に浮く大藤の翼かな
姫射干の風の抜け道照らしをり
* 万端に満々とたんぽぽの絮
引き抜きの女形は鶯に夏来る

若葉風

永澤千恵子

風光る一輛電車の軽き音
児の靴を返せば出づる水と蝌蚪
竿竹の売り声よぎる日永かな
* 満開の桜満載の反戦語
若葉風波が波追ふ湖の面

祭 笛

澤田英紀

* 女王になりたき蜂の過労かな
迷ひなき騎士の剣めく薔薇の棘
ソーラーパネル炎帝を疑はず
祭 笛 三代揃ふ総踊り
蜘蛛の囀の万華鏡めく雫かな

飛鷹選評



能村 研三

翻り 飛び 交はし つつ 初燕

笠井 令子

俳句では燕は春の季語とされているが、やはり初燕の姿には、春から夏への期待感がある。家々の軒に巢を作る燕は、人の暮らしとともに生きる鳥で、町中を飛び交う初燕をまぶしく見ていると私たちも元気が出てくる。空を多くの燕達が翻り飛ぶ様子を丁寧^に詠みあげている。

石ひとつ 梵字 一文字 卒業す

浜田はるみ

卒業された学校は、おそらく宗教の学部か、仏教思想を学ばれていた方なのだろう。一つの石に刻まれた梵字一文字にこだわりつつけ学問に没頭され、時代へのロマンを抱きつつ解き明かす姿はすばらしい。

うるはしき 哀歌の やうに 桜散る

山岡 純子

日本では古くから人々は、咲き誇る桜、空に舞う桜、散りゆく桜に心を動かされ、その様々な思いを詩歌に詠んできた。華やかでいながら優さに満ちた桜、命短い桜の花は哀歌のように散っていく。

くつつが へる 葉に 朱の 見えて 蓮五月

枇杷木 愛

蓮は、水の中からぐっと伸びてきた茎に、きれいな花を咲かせ、初夏に、爽やかな彩りを与えてくれる。かつて手賀沼の蓮見舟に乗り、舟が隠れるほどに丈が伸びた蓮の葉の中を潜ったことがあった。蓮の葉は風向きで覆った葉の蔭に花のつぼみを見つけたのであろうか。

桜 葵 降る や 今 更 結 果 論 坂下 成紘

坂下さんの今回の投句は全て「桜葵降る」の句であった。桜の花が散ったあとで、罅に残った葵が散って落ちる。華やかな桜花爛漫の頃とは違つてうら寂しさを感じる。ちよつと前までの盛んなころを懐しむといった風情も感じられる。

堰 越 えて 光 飛 び 出 す 春 の 川 石橋みどり

春になると土手には草が生え始め、雪解けの水や雨が溪流に流れ込み川は水嵩が増す。堰き止められていた水は勢いよく流れ出し、まるできらきらと光が飛び出していくように見えた。

禍 も 福 も 元 は お の れ の 種 袋 高木 春夫

前年に採つた種をよく乾燥させて、紙袋や布袋に入れて、天井や軒などの湿気のないところに吊るし保存する。種を蒔きそれぞれの植物の生長を楽しむのだが、その先は禍もあり福もある。おのれの人生と同じようだ。

麦 秋 の 風 攫 ひ ゆ く ゴ ッ ホ の 絵 岩波 博庸

ゴッホの絵で「収穫」という題の「麦秋のクローの野」を描いた絵がある。強烈な陽光を求めて向かった南プロヴァンスのモンジュール近郊ラ・クロー平野の収穫風景を描いた作品。この絵をじっくりと眺めていると麦秋に吹く乾いた風に攫われていくように思える。

沖作品



* 翻り飛び交はしつつ初燕

山梨

笠井 令子

閉店の葉書のとどく弥生
湖の村とほく一閃鳥雲に
遠目にも連翹の咲くひとと
初時きの支度をさをさ老夫婦
あたたかや仏足石を手でなぞり

埼玉

浜田はるみ

* 石ひとつ梵字一文字卒業す
紙風船ついて時間のゆるびたる
花ミモザ青い卓布の集会所
海市より届くサイレンかも知れず
百千鳥諏訪の野山を目覚めさす
梓川の風はまだやか花林檎
* うるはしき哀歌のやうに桜散る
一陣の桜吹雪や義民の碑
ゆるやかに老いてゆきたし山桜

長野

山岡 純子

能村研三選

* くつがへる葉に朱の見えて蓮五月

静岡

枇杷木 愛

わくら葉のからくれなゐを樟の樹下
桐咲いて杉玉鏝を深くしぬ
音たてて卵の花腐しの夜となりぬ
またたかぬ星の大きく夜の新樹
桜薬降る頬杖のテレワーク

* 桜薬降るや今更結果論

石川

坂下 成紘

桜薬降りてかのこと不問とす
桜薬降るや日暮に期するもの
一片の花に始まる物語
* 堰越えて光飛び出す春の川
風白し高く高くと辛夷咲く
何処からも桜さくらと解るほど
束の間の風と遊べる花吹雪